

第50回日本看護学会—看護管理—学術集会開催

「新・看護管理—看護の原点をみつめ未来を拓く」をテーマに

2019年10月23日、24日の2日間にわたり、第50回日本看護学会—看護管理—学術集会が、名古屋国際会議場を会場に開催された。学術集会会長は、愛知県看護協会会長・鈴木正子氏が務めた。テーマは、「新・看護管理—看護の原点をみつめ未来を拓く」。本学術集会では、地域包括ケアの推進、ダイバーシティ・マネジメント、人材育成、AIやIoTの医療への応用など多彩なプログラムが企画された。元号が変わり、看護管理の学術集会は今回で記念すべき50回を迎えたのを機に、今後の看護学会のあり方を問いかけ、新たな看護管理のビジョンを示す会となった。参加者数はのべ6500人。(本誌編集室)

学術集会のこれまでとこれから

記念講演では、「日本看護学会学術集会のこれまでとこれから」として、日本看護協会会長の福井トシ子氏が登壇し、第50回を迎えた日本看護学会の役割と歴史を紹介。「発足以来、実践に根ざした看護研究の推進と看護実践の質の向上を目的に、将来を見据えた看護職に求められる能力や、役割拡大などに関連する情報を発信するとともに、職能、専門、看護実践の場の枠を超えた看護職の相互交流の重要な場となっている」と述べた。

また、看護の将来ビジョンを踏まえた

日本看護協会の施策について、「全世代型地域包括ケアシステムを目指す」と語った。さらに、2020年に向けて、看護職が持つ可能性を最大限に発揮し、健康課題に積極的に取り組み、人々の健康の向上に貢献するために行動する世界的キャンペーン「Nursing Now」を紹介(57ページ参照)。講演の最後には、参加者に配布した「Nursing Now」のロゴが書かれた用紙を掲げての写真撮影を行い、キャンペーンへの積極的参加を呼び掛けた。

看護の原点を見つめなおす

基調講演では、「未来を拓く看護管理～変えてはならないものと変えていくもの～」(座長・福井トシ子[日本看護協会会長])として、学術集会会長の鈴木氏が登壇。自身の45年の看護経験から改めて看護を考えたとした講演では、助産師としての臨床経験から、看護管理者として行ってきた看護職の育成、組織経営について語った。

そして、AIやIoTなどの科学技術の目覚ましい進歩は医療情勢においてもグローバル化をもたらし、人々の健康観・人生観などに影響を及ぼしているとしたうえで、「看護を行うのも受けるのも心を持った人間である」と述べ、「看護師の立場で、自分の言葉で看護を語れますか?」と問いかけた。看護の原点を見つめ直し、新しい時代を見据えたマネジメントを考えることで、「ケアの本質とは」「看護とは何か」を問い続ける必要性を訴えた。

Kaizen への取り組み

交流集会(公募)2では、「Kaizen から生まれたセル看護は質改善と働き方改革に貢献する」(企画代表者:須藤久美子[株式会社麻生医療事業開発部])として、セル看護提供方式を活用した質改善と、残

業時間の短縮や生産性向上・ストレス減少といった働き方改革への効果についてディスカッションを交えながら解説した。

セル看護とは、患者や看護師にとって利益にならない「ムダ」を省いて、ケアの受け手の価値を最大化する看護提供方式。須藤氏は、そのために看護業務のムダ取りと業務の流れをマネジメントすることが重要と述べた。今学会の特別講演1「トヨタ副社長に学ぶAIロボット時代におけるモノづくり・人づくり」(河合満[トヨタ自動車株式会社副社長])の講演内で語られた「トヨタ生産方式」も、セル看護開発に深く関連している。現状に満足せず常にKaizenを目指す姿勢とリンクし、立ち見も多く出た交流集会の会場では、各所で自施設での実践の改善に向けた質問も複数出るなど、参加者の関心の高さがうかがえた。

「働き方改革」を考える

2019年4月に施行された「働き方改革関連法」は、看護管理者にとっても夜勤負担の軽減、超過勤務の削減などの課題がある。交流集会(指定)2「将来にわたり持続可能な看護職の働き方を考える～明日からどう働く?どう働いてもらう?～」などでディスカッションされたほか、口演や示説でも関連演題が複数みられた。単純な業務時間短縮を目指すのではなく、業務改善、業務の可視化や職務満足などと結び付けるなど、看護師の働き方、看護師1人ひとりの取り組むべき仕事を見直す契機となった。

*

次回第51回学術集会は、急性期看護・慢性期看護を分科会とし、2020年7月21日、22日、大阪府の大阪府立国際会議場(グランキューブ大阪)・リーガロイヤルホテル大阪を会場に開催される予定。

